

新説 宝のひょうたん

張天翼 作 斎藤秋男 訳

文研出版



必読選定

文研児童読書館

定価

発行日

訳者

発行者

印刷・製本

宝のひょうたん

550 円

昭和45年 6 月 1 日初版

昭和46年 4 月 1 日 2 刷

斎藤秋男

佐藤武雄

図書印刷株式会社



発行所

文研出版

東京都文京区向丘 2 丁目 3-10

TEL (03) 814-2151

大阪市天王寺区大道 4 丁目 128

TEL (06) 779-1531

©

1970 Printed in Japan

N. D. C.

923 宝のひょうたん

文研出版 昭和 45 (1970)

280 p 23cm

必読選定

文研児童読書館

著者との契約により複製禁止

埼玉県立能谷

昭和

46.11.13

受入

宝たからのひょうたん

張ちやう天てん翼よく作さく
斎さい藤とう秋あき男お訳やく
大お田た耕こう士し絵え



文研児童読書館のねがい

わたしたちは、わたしたちをとりまく、さまざまなものからいろいろ学んで大きくなっていきます。学校での学習からも、テレビやマンガからも、科学や知識を身につけ、また楽しみを味わいながら育っていきます。

けれども、せっかちに知識ばかりを自分のものにすることや楽しさだけを急いで追うあまり、ともすれば、人生の真実とは何か、人間として、どのように生きていくべきか、ほんとうの美しさとは何か、というようなたいせつなことを、忘れがちになるようです。これは、とても残念なことです。

そうならないためにも、わたしたちは人生の教師としての文学、ただしい生き方を身につけさせてくれる読書というものをたいへん重要なものと考えています。

このたび、わたしたちは、多くの著者、訳者、画家のご協力によって、今なお新鮮な感動を与えてくれる世界の名作文学、貴重な文化遺産である神話や民話、さらに伝記、ノン・フィクション、または未紹介の新しい力作などを選んで、文研児童読書館として、おとどけすることになりました。

みなさんがたの必読基本図書として、いつまでも愛読していただけるものと信じています。

編集委員

石森延男

昭和女子大学教授・日本児童文学学会会長

植田敏郎

一橋大学教授・日本児童文学学会理事

白木 茂

日本児童文芸家協会常任理事

関 英雄

日本児童文学者協会理事長

中川正文

京都女子大学教授・日本児童文芸家協会理事

福田清人

前立教大学教授・日本児童文芸家協会理事長

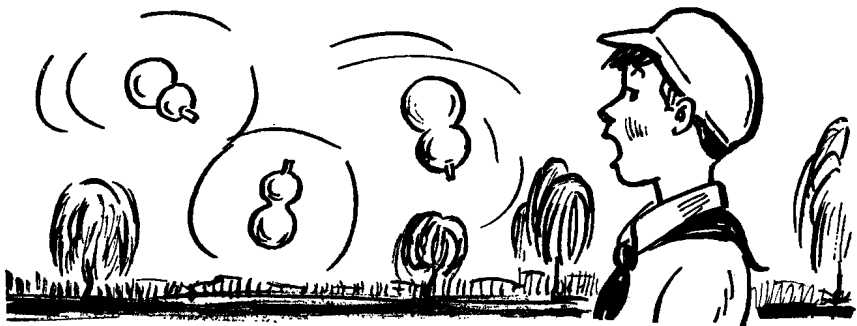
文研出版編集部



も
く
じ

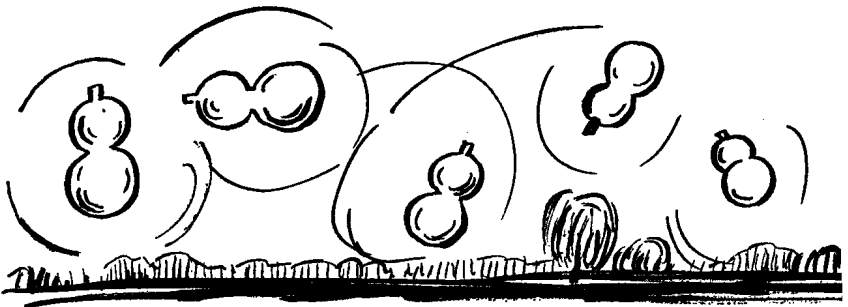


12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
宝のひょうたん出現！	ほんとに秘密は守れるか	新しい教室がほしい	ポケットのなかの衛生状態	川で金魚をつつてきた	きょうから特別な人間なんだ	“科学画報”紛失事件	将棋のこまの離れわざ	頭をつかうか口をつかうか	同級生・ちびっこ・とうさん	とうさんも幻なのか	“手くせの悪い”道連れ
173	157	138	122	109	93	74	60	50	39	25	11



13	にぎやかな町のできごと	191
14	ものいう金魚が分類法を考えた	203
15	数学テスト答案事件	218
16	頭のなかは大混乱	230
17	ひょうたんは火あぶりの刑	242
18	胸にいっぱい勲章ジャラ・ジャラ	252
19	思いきり泣いてみたいんだ	259
20	行くえ不明のワン・パオ学校に帰る	266
	あとがき	274
	『宝のひょうたん』の妙味	277
	斎藤秋男	
	関 英雄	

さし絵
大田耕士



宝^{たから}のひょうたん

張^{ちやう}天^{てん}翼^{よく}作^{さく}・齋^{さい}藤^{とう}秋^{あき}男^お 訳^{やく}





斎藤秋男（さいとう・あきお）
 一九一七年、東京に生まれる。東
 洋大学中国哲学文学科卒業。現在
 専修大学教授。中国の教育史・児
 童文化史を研究。一九五七年、六
 八年に中国を訪問した。
 中国児童文学の翻訳『ツバメの大
 旅行』『同級生ものがたり』（以上、
 牧書店）『このつき船の出る港』
 （講談社）ほかに『中国現代教育史』
 （国土社）『評伝・陶行知』（勁草書
 房）など、多数の著書がある。



大田耕士（おおた・こうし）
 一九〇九年、兵庫県に生まれる。
 教師生活十五年のち、作家生活
 にはいる。児童書などに独得の異
 色あるさし絵を執筆。
 現在はおっぱら版画教育の振興に
 意欲的につとめている。
 日本版画協会会員・木版画家。



1 宝たからのひょうたん出現しめっげん!

さあ、ひとつ、お話をしよう。だけど、まず自己紹介じこしょうかい。ぼく、ワン・パオ（王葆）っていうんだ。お話と
いうのは、このぼくのこと、いや、ぼくと宝たからのひょうたんのことなんだ。

みんなは、きくかもしれない。

「えっ？ 宝たからのひょうたんだって？ あの昔話むかしばなしに出てくる宝たからのひょうたんのこと？」

そのとおり、あの宝たからのひょうたんの話なんだ。

でも、ことわっておくけれど、ぼくは神かみさまでもなければ、化けものでもない。みんなと同じ、あたりま
えの人間なんだ。ぼくは、少年先鋒隊しょうせんぽうたいのメンバー。それに、みんなと同じように、お話をきくのが大好きだいすきな
んだ。

宝たからのひょうたんの話なら、ぼくは小さい時からよく知っている。おばあちゃんが、しょっちゅう、きかせ
てくれたから。おばあちゃんは、ぼくになにかさせようとするときには、お話をしてくれなくちゃならない。
それがぼくたちの約束やくそくだった。

「さあ、おいで！ あんよを洗あってあげる。いい子だね、パオちゃん！」

おばあちゃんは、あとを追^おってきながら、おいでおいでをする。

「いやだよ！ あついもん！」ぼくは、いやいやしながら、逃^にげだす。

「あつくないさ。さっきからさましてあるんだよ」

「そんなら、つめたいの、いやだ」

おばあちゃんは、ぼくをつかまえると、お湯^ゆはあつくもなく、つめたくもない、ちょうどいいかげんだという。そんなら、洗^{あら}わないわけにはいかない。

こうなると、ぼくも、どうにもしかたがない。だが、ここで、条件^{じょうけん}がある。

「洗^{あら}いたいなら、洗^{あら}わしてあげる。だけど、なにか、お話^わしてくれなくちゃ」

こんなぐあいで、おばあちゃんは、宝^{たから}のひょうたんのお話^わをしてくれるのだった。

「いい子だから、じっとして」おばあちゃんはぼくの足を洗^{あら}てしまうと、また新しい要求^{ようきゅう}をもちだす。

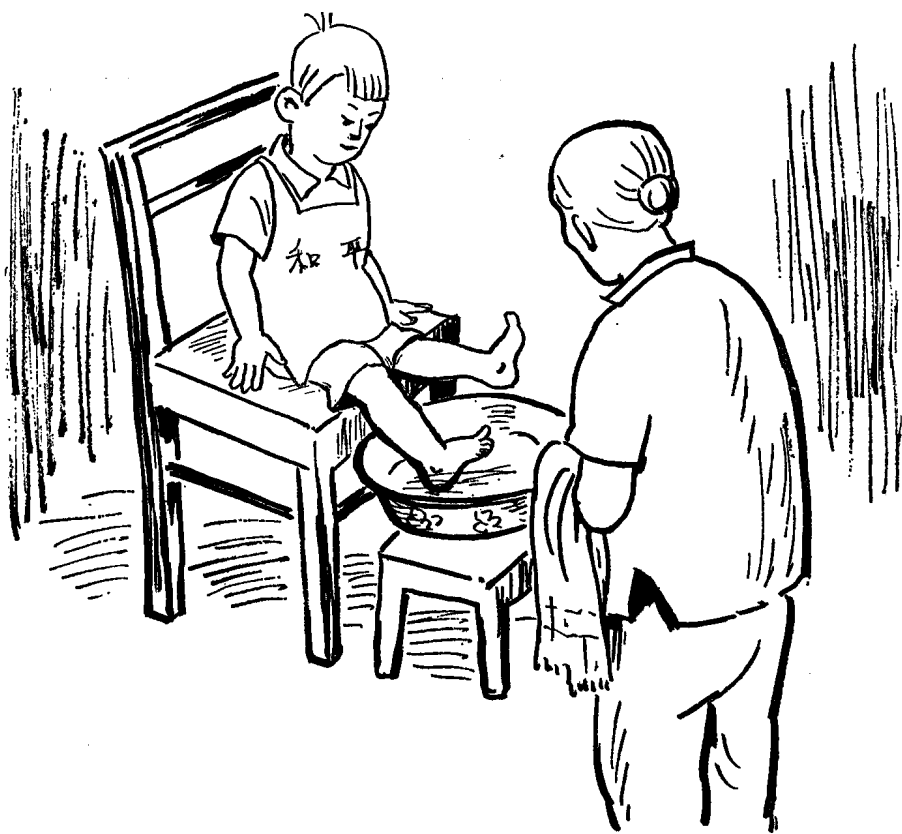
「こんどは、つめをきってあげようね……」

えっ？ 足のつめをきるって？ そいつはごめんだ！ ぼくは、は、だ、い、のまま、ぱっと逃^にげだす。だが、腕^{うで}をつかまれてしまう。しかたがない。

そこで、ぼくは条件^{じょうけん}を出す。

「それなら、お話^わをしてくれなくちゃ」

こうして、おばあちゃんは、もうひとつ——これもまた、宝^{たから}のひょうたんのお話^わだった。



こんなくあいで、ぼくはまだ小さいときから、ずっと十歳^きくらいになるまで、おばあちゃんの話^{はなし}をきいてきた。おばあちゃんの話^{はなし}は、そのたびにちがっていた。チャン・サン（張三）が神^{かみ}さまにめぐりあって、宝^{たから}のひょうたんをもらった話、そのつぎのは、リー・スー（李四）が遠足^{えんそく}の日^ひに、竜宮^{りゅうくう}まで出かけて行って、宝^{たから}のひょうたんをもらった話、また、ワン・ウー（王五）はとてもいい子で、おとなしく着物^{きもの}をきかえさせてもらったので、ごほうびに宝^{たから}のひょうたんをもらったという話、そうかとおもうと、チャオ・リウ（趙六）が手にいれた宝^{たから}のひょうたんは、と

いえ、煙はなけから掘ほり出したものだった。

チャン三サンでもいい、リー四スィでもいい、宝たからのひょうたんを手にいれさえすれば、だれだって、たちまちあわせいっぱい、ほしいものはなんでも手にいれることができるのだった。チャン三サンが「スイミツ、たべたいなあ」とおもえば、すぐさま、そこに大ざらいっぱいスイミツトウがあらわれるし、リー四スィが「大きなぶちの犬がほしい」とおもうと、あつというまにそいつがあらわれる——そして、かれの顔をみて尾おをふりふり、かれの手をなめるのだ。

それから、どうなったかって？ それからというものの、かれらは、もちろん、なにひとつ不自由ふじゆうのない日を送おくったのだ。

こういう話をきくと、ぼくは、いつも、自分だったら、と考えてしまう。

（ぼくに宝たからのひょうたんがあったら、どんなことをしようかな？ ほしいものはなんだろうな？）
ずっと大きくなってからも、ときどき、それを思いだす。数学の問題もんだいに手こずってしまつて、式しきをどう立てたらいいか、わからないときなんか、8という字を見ていると、宝たからのひょうたんを想像そうぞうしてしまう。

——ああ、もし、あいつがあったら……

（そうすりゃ、なんの心配しんぱいもないのに）

ぼくは、クラスの友だちと、ヒマワリをつくる競争きさうそうをした。ところが、ぼくのうちのときたら、どれもこれもひよろひよろして、てっぺんに小さな頭あたまがのっかっている、まったくあわれなかつこうで、だれの

にもかないっこない。すると、また、ぼくはあの宝たからのひょうたんを思いだすのだった。

(そうすりや、ぼくのは、断然だんぜん、みごとにヒマワリ、とびきり上等じょうとうなヒマワリだったはずなのに)

だが、それはぼくの空想くうそうでしかなかった。

それなのに、なにかにつけて、ぼくは、宝たからのひょうたんのことを思いだすのだった。いつだったか、科学かがくサークルの友だちとけんかしたときも、ぼくはやっぱり、ひょうたんのことを思いだした。

(もしも、ぼくにひょうたんがあつたら……)

あつ、そうだ。やっぱり、はじめから、ちゃんとお話しするでしょう。

——その日は日曜にちようだった。ぼくは九時にご飯はんをすませると、学校へすつとんでいった。ぼくら科学かがくサークルで電磁起重機でんじきじゆうきをつくることになっていて、それは十時からだった。

だが、その日はまったく、さんざんだった。サークルの連中れんじゆうときたら、みんな、ぼくにけんかを売るみたいなんだ。ぼくは、ヤオ・チュン(姚俊)と将棋しょうぎをさしていた。どう見たって、形勢けいせいはぼくに有利ゆうり。ぼくは、かれの「車」をとってしまった。ところが、ふいに——ヤオの「馬」が横よこから出てきて、ぱつと王手をかけた。ぼくは「王将おうしょう」を動かして、相手あいてをさけようとした。見ると、まんまに「大砲たいほう」が、砲車ほうしゃを前まえにおいて、待ちかまえているじゃないか。ぼくはヤオに、

「きみ、その「大砲たいほう」、どうしてそこにあるんだい？」

「ずっと前から、ここにあるのさ」